

一、さて温泉のあまり熱きはよろしからず。又ぬるきはもとよりよろからず。ただ溫柔和煦なるをよしとす。香川太冲の説に温泉は極熱のものをよしとす、極熱の熱勢人の元氣を助け元氣を振興し沈痾を起し癰疽を發すといへるは笑ふべきもの甚しきなり。……………温泉の能毒のわかるゝはあつきぬるきによることにあらず。湯筋の差別によることなり。故に極熱の湯にも寒冷の性をそなへし温泉あるべし。煎湯は熱湯にても石膏の煎湯は寒性なるがごとし。又さまで極熱にてなく其外の物にそますた純陽硫黄の氣ばかりを土中にて觸そゝぎて出來たる温泉なれば、その性温にしてよろしかるべし。故に温泉をみらぶはただ異氣に染むるそまらぬかをさくさ吟味し、自然天然のうぶのまゝなる水筋の湯硫黄の氣ばかりにふれそゝぎて出來る湯のあつからずぬるからず身にふれて溫柔和煦既に浴して後腹臍皮膚表裏内外煦々温暖のやゝしばしやまざる湯を極上々の良湯とおもふべきなり。筑前の巨原篤信も熱湯には浴すべからず

昔の熱海間歇温泉

日本の温泉で歴史上に有名なのは有馬熊野道後の三で、道後の温泉の碑は滅びても銘文は殘つてゐる。此等は何れも大和の朝廷に近いので

温なるをよしとすといへり。此ことばよしとすべし。

一、筑前の國三笠の郡天拜山の麓に温泉あり。村の名を武藏といふ。その温泉まことに右の注文のごとく異氣に觸れず。異臭異味を帯びず。自然天然のまゝなる湯のただ硫黄の臭氣を帯びてあつからず、身にふれて溫柔和煦既に浴して後腹臍皮膚表裏内外煦々温暖の氣やゝしばしやます。頗に浴すれども皮膚枯燥せず。疥癬梅毒一切の諸瘡ある人これに浴すれば皆邪毒を排出し瘡汁を托發し諸瘡ことの外わかやきたちて、扱は九日乃至二七日三七日の以後味よく平癒す。實に最上至極の良湯なり。それゆへ入湯の人にも近國よりあまたあり。温泉の理に達せざる人は兎や角やと評論もつけ有馬などの湯よりは格別おもしろい様におもふべけれども左にはあらず。世人ただ耳を貸んで目はいやしめ、遠きをしたひて近きをゆるかせにす、これその常なり淺間といふべし。

あるが、伊豆の温泉では伊豆山社と共に走り湯の名のみが古く知れて風土記逸文にも見えてゐる。熱海の方は鎌倉幕府の出來て關東が開けた

後に漸く有名となつたものと見える。

初めて熱海温泉のことを記載したのは五百五十年前の絶海と同時の義堂和尚日工抄の

應安八年二月某日、在熱海、與諸人出遊、

僧舍有道人、指一地曰、嘗平左肆虐爲害、

據此地造館、臨誅屋陷入地中、人皆云活陷

地獄、故至今呼曰平左衛門地獄、植松一株

蓋表其墓也

といふものである。

地名辭書には法齋湯と此の湯とを別として、

大湯に當てたが義堂の見のたのは恐らくは間歇

温泉其ものでなくて、幾らもある他の短い週期

を持つものと察せられる。旅行用心集に擧げた

法齋湯が「氣違の法齋坊く」と呼べば其聲の大

小に隨て沸き出るといふ外に、清左衛門湯も清

左衛門弱しと小くいへば小さく沸き、大きく呼

べば大に沸き出るといふのであつて、横井也有

(延享二年)の熱海紀行に之を平左衛門湯として

ゐるので明かな如く、小澤の法齋湯とは別であ

ることになる。

此の後に天文十三年宇牧の東國紀行に熱海湯治の記事があるが、

梅が香もわくや出湯の春の風

といふ一句を記すべき外に間歇温泉に關しては何等是にも見るべきことが載せてない。

熱海間歇泉の噴出状態を記載した最も古いのは

林道春の丙辰紀行(元和二年、一六二六年)で

其の伊豆山の走湯と熱海とを列記した文は左の

如し。

走湯山

走湯山は伊豆の山の事にて侍る。爰にましま

す神を走湯權現と申ける。昔鎌倉右大將伊豆

箱根を信じ、常に蘋蘩の禮をいたし給ふ。二

所參詣といへるは是なり。此ところに出湯あ

り。石はしる瀑のごとし。走湯の名も温泉に

よりての故にや。又一里計西に温泉あり。そ

の所を熱海と名づく。人のよろづの病あるも

の浴すれば、たい驗あり。先年余も人にさそ

はれて湯に入侍りし。其湧所をみるに潮の進

退によりて岩の間より烟むしがかりて、人の

近づくべくもあらぬほど、あつきに熱湯わき

出て、流れはしるを、笥をかけて家々にどり
槽に湛へて人々に入せけり。

絶境靈蹤亙古今、尋名吾輩亦登臨、走湯權

現救人處、便是驪山神女心、

此の文によれば道春の見たるは丙辰以前にて、其の間歇性は明かに當時から續いたもので、又た其の湧出した温湯を引いて入浴に供したことも明かである。此の頃に既に石蓋を横へて其のまつすぐに迸出する壯觀を妨げてゐたか否かの點は不明であるが、岩の間より烟むし上がるといふので多分既に引湯の目的で横に流してゐたのでないかと想はしめる。若しまつ直に噴騰した壯觀を呈してゐたならば、更に何とか之を形容した筈であ

らう。

地名辭典には此の後元祿年間に出來た熱海地志に晝夜三回づゝ湧くことゝ長湧とを記してゐるが、原書を見ぬから之を舉げぬ。

松崎慊堂は文化元年四月に掛川侯嗣に隨行し

て熱海に遊んだことがあつて遊豆小志といふ寫本九葉の一篇(内藤文學博士藏)がある。今から百二十年前の温湯湧出の狀態が名文で詳細に記載されてゐるから、之を抄録する。

八十年前の

二十日拂晨(小田原を)發、南折入熱海路、……四里米嘯村、……五里根府川、關扼兩山間、三里繪浦村、二里赤澤村、……五里川堀村、……三里門河、門讀如繁茂之茂、水北之村亦受名取焉、一日境川、豆相



以是水爲界、米囑以南至此民多以伐石爲業、登行三里日阪、臺山上平處也、三里禮拜嶺、望伊豆山祠、……二里鳴澤、澗流淙然、一里伊豆山祠、々分上下、官道貫其間、……三里達熱海村、々三面負山、東西面海、聚落三百烟、民雜農湯戸二十七、公子館於今井有忠家、……

……有忠村中巨室、屋宇沈々、此小邦之君、其

正室曰遊仙洞、……正室之西因商而樓之、

曰一碧、園中水石亦具體云、

二十一日晴、浴室之制、中安二槽、長五尺有奇、深廣半之、其一自湯池者熱不可觸、投之以卵、立熟、其一浴槽也、將浴挹湯前槽注之



伊豆熱海溫泉泉

一伏時方得浴、味鹹苦、色澄澈可鑑也、……二十三

日晴、待公子觀湯池、々在

館東、木欄四周、可十畝、

一巨石出沒于平地上、湯全

涌其下、石爲之凹深、々三

尺許、其長三之、將涌聲如

怒雷、愈鳴愈涌、其所衝激

如駁釋機、墨石防之、其涌

有期、大槩十日一小變、三

十日一大變、初十日晝涌于

卯巳未、夜涌于酉亥丑、可

校漏刻之差、次十日潮遲、

々之又遲、晝移于辰、夜移

于子、其極晝夜涸、或夜涌

而晝涸、凡一晝夜、後十月初間晝夜十八涌、

間漸希疏、竟復其初焉、世但知初十日六潮耳

……二十四日晴、待公子過湯前祠、東行百

步、至野中湯、草莽之間泉眼無數、左右沸爾

平左湯距此數十弓、亦小井不可浴、其東南百

餘歩、曰清左湯、舊稱法齋湯、以石投之即涌石堆井填、遊者傾耳聽其沸聲已、皆硫黃泉、性味與湯池迥然、(迥異歟)……東行三里、謁伊豆下祠、々距上祠磴道五百餘級、……又降二百餘級、澡瀑布泉而還、瀑布泉前臨絕海、後倚洪崖、竹樹蒙密、過午不見日影、峕下之洞、深十五歩、泉開其中、瀾々分流、受而瀑之、上瀑濺々、有屋而槽焉、下瀑特大、奮迅落於海峕、亦硫黃泉、微有瘴氣、其色清白、溫暖甚適人、

此の記事から熱海溫泉當時の狀況を考ふるに今の阿保、志村等諸邸の在る邊は草むらで、野中湯の名の如く處々に溫泉の噴出してゐたので

箱 根 温 泉

(秋里籬島)

一、蘆の湯 七湯の其一箇なり。權現阪よりこれまで一里、浴屋は町の中にあり。一二三と仕切て入湯す。氣味澁く苦し、又硫黃の香強し

ある。今回其邊に龜裂が出来て溫泉の噴迸したのは怪むに足らぬ。平左衛門湯清左衛門湯は共に微々たる湧出に止つた。而して此の時には大湯は十畝ほどの面積に木柵をめぐらして、其内に涌出口が沈澱物で石の如き塊を造り、中央が凹んで三尺ばかりの深さで十尺許の徑の池となり、其上に石を積み重ねて噴出を妨げて流れ出す湯を笕で引いたものと思はれる。

此の晝夜六回の湧出は明治十一年まで同様で長湧きも十二時間許續いて其後五七日位湧出不規則となることも慊堂の記載と同じことであつた。

流れ湯みな黄色なり。功能は癩病、微病、五痔一切の腫物に相應して早く治す。浴屋の前兩側に一町許入湯の宿舎ありて奇麗なり。